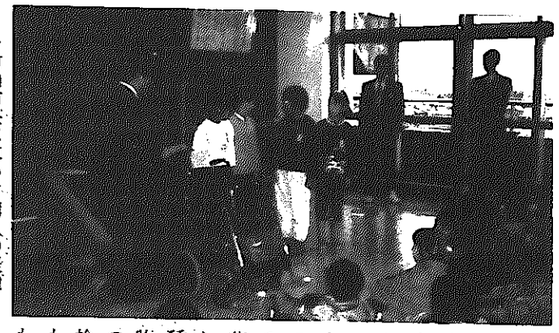
一つの種から大きな優しさ

白根小学校3年生が車いすを寄贈



▶竹内市長に車いす購入の経緯を説明する児童たち

昨年十二月二十一日、白根小学校の三年生百三十五人が市役所を訪れ、車いすを市へ寄贈しました。寄贈された車いすは、文化祭のバザーの収益金で購入したものです。

同小学校三年の児童たちは、文化祭のバザーで自作の押し花のしおりや草木染めのハンカチ、文鎮などを販売しました。草木染めのハンカチや押し花のしおりは、春先に理科の授業で種をまき、丹精込めて育てた植物を使って作成。文鎮は、理科の授業で河原へ出掛けたときに拾った石に色着けをして作ったものです。これらの品物の値段も、「社会科の授業でお店のことを勉強」して付けました。こうして作った品物は順調に売れ、収益金は四万円に。「困っている人たちのために役立ててもらおう」と、このお金で車いすを購入したものです。

寄贈のときには各クラスの代表四人が、竹内市長に「一つの種から出発して車いすになりました。大事に使ってください」とあいさつ。竹内市長は「白根で困っている人たちをなんとかしようと、一年間掛けて一つの種から考えたのは素晴らしいこと。大事に使わせてもらいます」と感謝の言葉を述べました。

寄贈された車いすは、市役所を訪れた身体の不自由な人やお年寄りに使ってもらえるようにと市役所一階に設置されています。

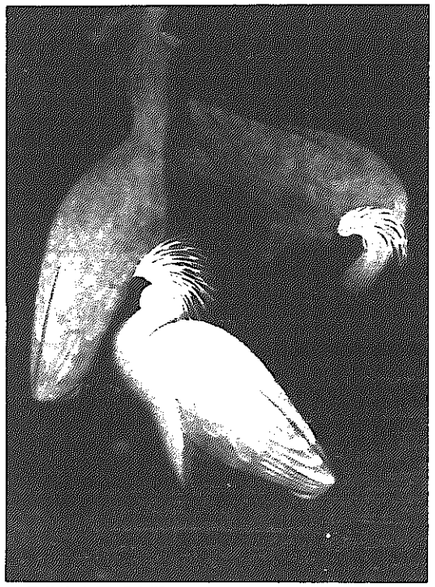
絵にかける心、今も熱く

長井亮之展

白根市出身の日本画家長井亮之さんの絵画展が一月十三日から二十一日までカルチャーセンターで開かれ、七日間で約三千三百人が来場しました。

この展覧会は、「日ごろ文化や芸術に親しむ機会の少ない市民に、白根が生んだ巨匠の作品を鑑賞してもらい、少しでも芸術や文化に親しんでもらおう」と市の地域づくり助成事業補助金をもとに、市民の有志からなる実行委員が主催したもの。企画から会場の設営まですべてが三十八人の実行委員によるものです。出品されたのは「待春」、「白孔雀」など百五十号の大作をはじめとする七十数点。一般的には展示されることがない小下絵やデッサンも長井さんの好意で展示されました。展覧会の前日、会場を訪れた長井さんは「デパートなどの展覧会でプロの人でも飾り付けが大変なのに、すべて市民の手作りで、このような催し物を私のためにやってくださって、ありがたいことです」と話し、市民の実行委員による取り組みを高く評価しました。

▲オープニングセレモニーでテープカットをする長井亮之さん（右から3人目）



▲長井亮之画「朱鷺」

長井さんは明治三十六年、白根市四の町の生まれ。これまで数多くの展覧会で賞を受賞、日本美術院（院展）無鑑査出品、平成五年には新潟日報文化賞を受賞するなど日本画の巨匠として知られています。現在は、新潟市に在住。九十二歳になる今も、県内で最長老の日本画家として活躍中です。「とにかく小さいころから絵描きになりたかった。絵を書いていれば、どんな苦労もすべて忘れられますから、打ち込めて今まで生きてきたんだと思いますよ」と、これまでを振り返ります。「美術というのはここまでくれば良いということはありません。生涯勉強です。これからも絵を描き続けたいですね」と衰えることのない絵への情熱を静かに語ってくれました。

大凧と歴史の館冬の陣

しろね大凧と歴史の館 新春特別企画展

今年も一月二日・三日、しろね大凧と歴史の館が無料開放され、家族連れなど正月の一時を館で楽しもうという人たちでにぎわいました。

今年の新春特別企画は「なつかしのキャラクター凧展」。鉄腕アトムやおそまつくんなど、思わずつないだ子供の手を放して駆け寄りたくなってしまうくらい、お父さんたちにとっては懐かしいヒーローたちがいっぱい。また地酒やル・レクチエなども振る舞われ、正月気分をいっそう盛り上げました。

年始のあいさつは大凧と歴史の館でといわれるような、白根市の正月の風物詩を目指しての館〝冬の陣〟でした。

無病息災を祈って

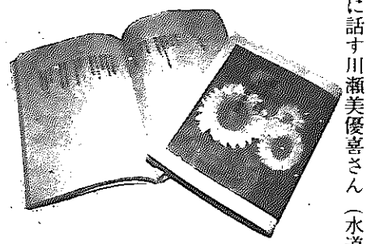
高井東 大通一・二丁目 自治会さいの神

小正月の一月十五日に、高井東自治会、大通一・二丁目自治会で火祭りの行事「さいの神まつり」が行われました。両地区自治会では、自治会の融和と子供たちの思い出づくりにと毎年この行事を行っています。

あいにくの雨にもかかわらず、両地区とも子供からお年寄りまでたくさんの住民が参加。それぞれの地区では、子供会やお年寄りの会が作ったお汁粉なども振る舞われました。竹を組んで作った塔に火が着けられると、ぱんぱんと大きな音を立てて竹がはじけ、勢いよく炎が上がります。集まった人たちは火を囲んで無病息災を祈りました。

日常の中から生まれた詩集

川瀬美優喜さん（水道町3）



「若いころから詩を書くのが好きで。いつか詩集を出したいと思っていました」とうれしそうに話す川瀬美優喜さん（水道町3）。川瀬さんは昨年十二月、詩集を自費出版しました。

詩集には、ここ十数年間に新潟日報の生活詩で入選した作品三十編が掲載されています。タイトルは「夏の音」。自身の人生を四季に、その季節の中で起きたさまざまな出来事を音に例えて表現しています。

日常の中で、ふっと心に残ったことを詩にするという川瀬さん。「これからは読む人が希望を持てるような明るい詩を書いていきたい」と意欲的に話してくれました。

●身近な情報をお寄せください（企画財政課広報広聴係☎373・2111）